



Title	『骰子の一投』コスモポリス版について
Author(s)	高階, 早苗
Citation	études françaises. 2006, 38, p. 67-88
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93743
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『骰子の一投』コスモポリス版について

高階早苗

— 序論 —

『骰子の一投』が初めて雑誌『コスモポリス』¹に掲載された時、マラルメはジッドに宛てた書簡の中で、「つまり文字配列 pagination について、というのもそこに効果全体があるのです。²」と述べている。ここから如何にこの作品において文字配列による効果が重視されているかが分かる。この前例のない形式の作品を載せるために、当時の担当編集者は大変苦勞して責任者を説得し、マラルメもこの作品が日の目を見るに至ったことに大いに感動している。とはいえページ数や紙面の大きさなどの制約のせいで「半分しか表現できない³」不満の残る出来であったことも否めない。実際、コスモポリスが出版される5ヶ月前の段階で既に、挿し絵つき豪華本で決定版を発行する計画が持ち上がっており、コスモポリス版の完成後、時をおかずにそちらに取りかかったようである。その計画はマラルメの死によって中断されたが、残された校正刷りをもとに遺族の手で1914年 NRF 版⁴が出版された。しかしそこにも紙面の大きさなど制約があったため、60年以上の時を経た1980年ついに、詩人の意志を忠実に再現したロナ版⁵が出版されるに至った。

決定版の校正刷りが出来上がると、マラルメはヴァレリーに、それをコスモポリス版の「ぼろ」と取り替えようと言っている⁶。これを字義通りに取れば、マラルメにとって決定版に比べるとコスモポリス版は顧みる価値のないものだったかのように見える。しかし、厳しい条件のもと、決定版と同じ効果を目指して工夫がなされているコスモポリス版を試作品として無視する

ことが正当と言えるだろうか。

二つの版を比較した時見えてくるもののほとんどが、決定版の文字配列の絶妙さであったとしても、比較することでそれはより鮮明に見えて来るのではないだろうか。そしてコスモポリス版の配置にも決定版にはない優れた工夫がいくつかある。そのことがこれまで触れられてこなかったことは片手落ちといえよう。本論文ではコスモポリス版と決定版を単なる試作と完成品として見るのではなく、詩人の構想を具現化した二つの異なる形態（その完成度には大きな差があるにせよ）として比較分析してゆくことにする⁷。そして、マラルメが最終的に実現させようとしていた効果を理解することが、本論文の目的である。尚、ここで問題とするのはあくまで文字配列に関するもの、例えば字体、文字の大きさ、配置、括弧の使い方などであり、単語の変更など直接意味内容に関わるものには触れないこととする。

1. 全体の文字配列

コスモポリス版が9ページであるのに対し、決定版⁸は11ページである。しかし更に大きな違いは、コスモポリス版が左右それぞれ別々に一ページを構成しているのに対し、決定版は左右ページを合わせて一つのページとし、横長の50cm×33cmという大きな紙面を形成していることである。どのページも漫然とした印象を受ける前者に比べ、当然後者では紙面が拡大した分だけ、余白を大きくとった自由で大胆な紙面構成が可能となっている。

例えば最初に背景が描かれる決定版の第3ページでは、blachi / étale / furieux から始まる水平な文字列が左右ページを横切り、この物語世界での情景—— 嵐の夜、たちこめる雲と波頭によって境界が曖昧なまま広がる水平線—— を描き出している。この文字配列と blanchi という単語は、読者が頭の中で白と黒を転換させる、つまり黒い文字を白い雲や波に、白いページを真っ暗な空と海へと変える作業を助けている。そしてこのダイナミックな水平方向への移動が、右下の語群で描かれる「沈んでゆく船」を、語の意味だけでなく視覚の上でも想像させるのである。それに対しコスモポリス版 (p.2) で

は、書かれている内容は同じであってもページが縦長なため、水平線の部分が途中で分断されて二つの列になってしまっている。左右両ページを合わせて横に長く伸びる線があったからこそ、その半分の横幅しか持たない右下の文字群が船影を描き得たのであり、決定版に比べてしまうとコスモポリス版の第2ページは、漫然と繰り返される左右反復運動にすぎないとさえ思われる。

もう一つ同様の例を挙げるとするならば、決定版第5ページ、コスモポリス版では第4ページにあたる紙面が適当であろう。そこでの視覚的効果の優劣は一目瞭然である。両者の違いはただ一点、N'ABOLIRA の位置である⁹。コスモポリス版では左下の端にこの文字は置かれているが、決定版ではそれまでの全ての文字が左ページに置かれているため、全くの空白である右ページの一番下に、この文字がまさに「落ちて来る」印象を受ける。左のページを上から目で追ってきて最後に右ページの黒い文字に滑ってゆくこの動きによって、暗い波間に落下する真っ白な帆（＝花嫁のヴェール）のイメージが鮮烈となる。

また決定版では紙面に余裕があるため、文字群と文字群の間に空白を大きくとることも可能である。そのおかげでそれぞれの関係性の希薄さ、濃厚さが瞬時に把握できるようになっている。それは全てのページの様々な語群間に言えることであるが、その特異な例と言えなくもない決定版の第7ページをここで分析しておこう。ここでは左上の *plume solitaire éperdue* と、*sauf que la rencontre* から始まる右側の語群が、*sauf que* を梃子にして明らかにバランスの異なる釣り合いを取っている。

立仙順朗は YX のソネの解釈の中で、12～13行目にかけての *encor que* について「<un or agonise> 以下12行までの主節と、第13・14行にあたる従属節とを両翼に担い、両節のバランスをとり、全体を転換する梃子の機能を果たしている。」¹⁰ と述べている。更に、マラルメのテクストの終章部では、しばしば留保的に追加された例外事項が主節をことごとく覆す潜在能力を持つことがあると指摘されている。

問題のテクストに戻ると、羽根は前のページの動詞 *voltige*（旋回する）の *vol*（飛翔）の部分から連想されて現れてきた、いわば幻である。この「旋回する羽根」を仮に A とするならば、右の一連の語群が描写するのは「とうと

う海面に触れ、動かなくなる羽根」Bの姿である。もしAとBを連結する語が別の物であれば、「旋回した羽根が海面に落ちる」という連続した情景としてこのページを捉えることができたかもしれない。しかし、*sauf*（あるいはそれとも）という連結語によって、ABの両方でなく、AかBのどちらかのみしか実在していないことが示される。つまり「旋回している羽根」か、「落ちてしまう羽根」かのいずれかなのである。

このページではまず、前のページを引き継いで、渦の中で旋回する船の帆の比喩、つまり幻として羽根が現れる。ほとんど単語のみに近い状態の *plume solitaire éperdue*¹¹ が中空に投げ出され、それよりはるかに分量の多い譲歩節の中で、*sauf*（あるいはそれとも）という語によって半透明となった旋回する羽根の幻の向こう側から、羽根が真っ暗な海面に落ちていく姿——つまり未来の可能性の一つである沈んでゆく船（の帆）——が透けて現れてくるのである。こうしたバランスは、詰め込みすぎた¹² コスモポリス版の第5ページでは窺うことができない。

紙面の狭さからコスモポリス版では文字配列が台無しになってしまっている例は枚挙にいとまがないのでここでやめておくが、こうした比較を行うことで、単独で分析するよりも決定版のダイナミズムがより鮮明となることは明らかである。

2. ページの冒頭と末尾の語について

コスモポリス版は決定版より2ページ少ない。それをカバーするため決定版の第1、第2ページと第6、第7ページの内容が、コスモポリス版ではそれぞれ一つのページ内（第1ページ/第5ページ）に収められている¹³。更に後者では単純に二つのページを一つにするのではなく、後半部分を一部、その次のページに持ち越している。つまり冒頭と末尾の語が変わってきているのである。自由な文字配列となっているこの作品ではどの単語をページの冒頭と末尾に置くかも自由であり、それらの語は自然と強調される。当然マラルメは特別な配慮をもってこれらの語を選んだはずである。そこで以上の二箇所、又それに加え、ページ間での文章の切れ目に変更されているコスモポリ

ス版第7～第8ページ（決定版では第9～第10ページ）について、以下で分析してみよう。

まず最初のページであるが、決定版第1ページは UN COUP DE DÉS とのみ記されていたので、これらの文字は題字の機能も持ちえたが、コスモポリス版ではその機能は失われている。ただし、これらの文字のもうひとつの重要な機能——最終ページ末尾の un Coup de Dés が回帰してゆくべき「夜空に燦然と輝く星」を視覚的にも示す役割——は、同じくらい明瞭に果たしている。それだけでなく、決定版では第3ページで示された海と空の情景を、コスモポリス版は第1ページから示すことに成功している。つまり、上方の星 UN COUP DE DÉS に対し、中盤やや下がりぎみの位置で左右いっぱい伸びている2行（JAMAIS も含めると3行）は水平線と波の役割を果たし、一番下の DU FOND D'UN NAUFRAGE は船が呑み込まれてゆく淵を暗示しているように見えるのである。これは縦長の紙面だからこそ可能な文字配列に他ならない。

次にコスモポリス版の第5ページであるが、かなり無理をして詰め込んでいるため、決定版で大きな効果を発揮している *COMME SI*～*COMME SI* の円環¹⁴の構図が明確に浮かび上がってこない。下半分についても、第1章で分析した *plume solitaire éperdue* とそれ意外の部分との対立が、文字配列からは読み取れない。

もうひとつこのページには非常に重要な変更がある。それは、マラルメが決定版第7ページの内容を全てをを入れるのをやめ、最後の5行分を次のページに回していることである。これまでの分析のほとんどはコスモポリス版の欠点を指摘する結果に終わっていたが、このコスモポリス版第5～第6ページの切れ目については評価できる効果をあげている。切れ目が変わった為コスモポリス版では第5ページ最後の文字は *quiconque* となり、その新たな登場人物の身分が宙づりにされたまま読者はページをめくらされる。そして次ページ最上段という位置によって、*prince amer de l'écueil*（岩礁にいる苦しみの王子）の登場は、決定版よりもはるかに華々しいものとなっている。しかも上段の左端ではなく中央というこの位置は、2ページ前の LE MAÎTRE（船長）の位置と同じである。船長の新たな人格として現れるこの王子が立つ

位置としては申し分がない。

そうしてこの苦悩する王子、ハムレットのように二者択一の間で揺れる王子の苦しみが、コスモポリス版第6、第7ページの見開きを使って *Si / c'était / le nombre / ce serait / LE HASARD* という癖のあるイタリック体の文字群¹⁵で表現される。*c'était / le nombre / ce serait / LE HASARD*の文字配列は決定版とは大きく異なっている。以前この文字配列が、沈んでゆく羽根＝骰子が星となって夜空に昇るための鍵になっていることを詳述したが、それはやはり独立した横長の空間があつてのことであり、コスモポリス版でマラルメはその意図を捨て、むしろ左右ページが異なるからこそ可能な *Si* までも含めた命題に対する揺れに重点を置くことを選んだように思われる。決定版ではこの部分は全て大文字であり、王子の問題という個人的な内容ではなく、物語内容を超越した普遍的な問題のように描かれているのに比べ、小文字であることも、この2ページが王子のドラマという形を取っている印象を補強している。そしてこれら2つのページの結論として、最後に右下で小さく2行に渡って羽根が落ち *Choit / la plume*、王子の運命が暗示される。

しかし決定版にはない *Choit* の前の括弧の存在によって、この落ちてゆく羽根の姿がこの2ページで完結していないことを示すのをマラルメは忘れていない。括弧については次の章で分析するが、この括弧とその前に少し広くとられた空白が、この独立した羽根の姿を次のページへ引き入れるのである。ページ内で独立性を保ったこの「落下する羽根」という最後の映像は又、「落下するヴェール」という印象的な映像を思い出させる。船の帆の比喻から始まったこの宙づりにされた時間の前へと戻し、止められていた現実の時間が再び流れ始めることを予感させるのである。

この作品において、とりわけページの右下に置かれた最後の文字群が重要になる原因のひとつは、そこが常に「落下地点」「沈んでゆく先」あるいは「落下していった(沈んでいった)もの」となっていることである。決定版ではほぼ忠実にそれが守られている。ざっと見ても、NAUFRAGE (p.2)、sa béante profondeur [...] (p.3)、naufrage [...] où vaine (p.4)、*enfoudre* (p.7)、*gouffre* (p.9)、dans ces parages / du vague / en quoi toute réalité se dissout (p.10)などがすぐ挙げられる。また一見あてはまらないと見える第5ページでも、

右下の N'ABOLIRA は、その左ページ最後の *chancellera / s'affalera / folie* を受けて、視覚的には落下する帆＝ヴェールを想像させており、二つの *COMME SI* によって円環構造を取る第6ページでも、右下の *COMME SI* の直前では落下して行く骰子（羽根、帆）の姿が描かれている。第8ページは語群として見れば *un roc / faux manoir* という障害物であるが、リュベガによると「石」は「固く握られた船長の拳」でもあり¹⁶、その説を採用すれば、拳が砕かれ波間に消えてゆく様子から骰子が波間に落ちてゆく姿を連想させられる。石＝拳が砕け、それが押し止めていた無限が何らかの形で出現するはずであるとほのめかされているこの部分、その最後の単語 *l'infini* は、第2ページで *CIRCONSTANCES* を修飾していた *ÉTERNELLES* とも呼応している。

ここでコスモポリス版に戻ろう。こちらでは先程見たように第5ページを閉める単語が *en foudre* から *quiconque* に変わっている。それが第6ページ冒頭の王子の登場につながり大きな効果を生んでいることは既に述べたが、全ページの統一を考えるならば確かに異質といえよう。決定版での *en foudre* も深淵とは言い難いが、骰子が落ちてゆく光景としての嵐の海の遠景である第2、第4ページ末の *NAUFRAGE, naufrage [...] où vaine* と呼応しているので、全体としての統一は取れている。そもそもコスモポリス版は2ページずつ進んでゆくので、ページをめくる回数も決定版の半分以下である。文字が右下に落ちてゆき、ページをめくるその羽撃きとともに次のページの冒頭へと昇る効果を体験するには、その数では少なすぎる。それ故コスモポリス版では右下の文字の統一よりも王子のエピソードを劇的に描くという選択肢が選ばれたとしても不思議はない。それに対し、たつぷりとページを取った決定版では「落下」が重視されるのは当然であろう。「深淵への落下」と「彼方への上昇」こそがこの作品のクライマックスなのであるから。

さて今度はコスモポリス版第7ページ、決定版での第9ページ末尾の問題であるが、既にコスモポリス版第5ページで原則が破られている以上、より印象的で、ページ内でもページの前後も大きな機能を果たす *Choit / la plume* が、最後の語群として選ばれたのは妥当であろう。しかしコスモポリス版が決定版とは異なる部分を強調しながらそれなりの成果を挙げているとしても、やはりそれは制約の中から生まれた苦肉の策であり、決定版での全体を通し

た効果とは比較にならない。決定版第9～11ページの終局では、ギリシャ神話の水に沈む乙女が大熊座となって夜空の星となる物語りになぞらえて、最も深い淵が最も高い宇宙へと通じることになる。第11ページ冒頭(EXCEPTÉ/à l'altitude / PEUT-ÊTRE / aussi loin qu'un endroit / fusionne avec au-delà ~を除いて / はるか高処 / おそらくは / 彼方と融合する / ある場所と同じくらい遠く [を除いて]) へと連なるこのドラマを描きするために、第9ページの最後の語はより端的に深い淵 *gouffre* でなければならなかったのである。

3. 括弧の使用について

これまで述べてきたもの以外にコスモポリス版にしか見られない特徴として、括弧の使用が挙げられる¹⁷。二つの版での相違箇所は基本的には紙面の制約上不可欠なものであった。それに比べ、括弧のあるなしは制約とは無関係に見え、それだけに尚一層括弧の効果を考察することが解釈上重要だと思われる。それではまず以下にその2箇所を挙げておこう。

A) 第6ページ12行目から最終行まで

B) 第7ページ下から2行目から第8ページ7行目まで

これらについて、不思議なことに先行研究ではごく稀にしか触れられていない。あれ程詳細な研究であるデイヴィスの著書が言及していないことは殊更意外である。コーンはかろうじてどちらの部分についても、コスモポリス版では括弧になっていることを指摘し、「切り離された不死の観察者」による「外部からの」客観的な描写であると述べている¹⁸。

唯一この括弧に注目したリュベガは、『詩集』の中でマラルメが括弧を用いた二篇の作品を引用しつつその役割を説明している¹⁹。

まず YX のソネについて彼の主張を整理すると、この詩は全体が目の前に今ある「誰もいない部屋」について描写しており、無人である理由を述べているのが Car から始まる括弧の部分だというものである。「何故誰もいないのか」という疑問に対し、「主人は～に行ったから」というように、主人公が

既に終えた行為を提示している。

マラルメが好んで用いた舞台「不在の部屋」は、これから登場人物が現れ行為を行うための場所ではなく、登場人物が消えた後の情景（＝結果）をししばしば表している。物語内容は基本的には不在の部屋の見せる幻想であるが、それと同時にそこで何が起こったのか（＝原因）が語られることもある。YXのソネで中心となっているのは不在の部屋を舞台に起こる「水の精を巡る物語」であるが、実はもう一つのドラマ「主人公の冥界下り」が括弧の中で語られている。つまり全体が「目の前の不在」、括弧の中がその原因となる「過去に起こったはずのドラマ」という構図となっているのである。

A la nue accablante tuはこの構図を反転した形になっている。括弧の外側が「過去に起こったはずのドラマ」—— 疑問形で描かれた「嵐で難破する船と深淵の人魚の姿」であり、括弧の中が「目の前の不在」—— 「水飛沫」である。目の前にあるのは波ばかり、しかしこの波は、起こったはずの出来事を全て呑み込んだ後、まるで何もなかったかのように沈黙しているのかもしれない—— だからその波間に一瞬の幻を、読者は垣間見させられるのである。

ここまでがリュベガの解釈であるが²⁰、舞台が現実の世界であり、今そこに誰もいないのであるならば、その原因となる過去の出来事もまた事実として語られるべきであろう²¹。その現実性に留保を加える為に、YXのソネでは「主人公の冥界下り」に括弧が、A la nue accablante tuでは難破に疑問詞 quelが付けられているのだと考えられる。

繰り返しになるが、YXのソネでは「主人公の冥界下り」は内容的には現実離れしていても過去の事実として語られており、その意味においては二つの詩編は括弧の外側で幻想、括弧の内側で現実を描いているとも言える。又、上で見たように、原因（過去に起こったはずのドラマ）— 結果（目の前の不在）として考えるならば、二つの詩篇での括弧の内外は逆転している。

『骰子の一投』は分量が多く時制も複雑であり、リュベガの図式を単純にあてはめることはできないが、直説法単純過去が現れるのは括弧の中の二箇所だけである²²。第3ページで船長の過去の経験を語る際、既に直説法半過去が用いられていることもあり、時制にあまりに重きを置くことは躊躇われる

が、しかしあえてリュベガの論を筆者なりに以下で敷衍してみよう。

まず最初に言えるのは、コスモポリス版括弧の部分 A) で単純過去の関係詞節を導く「石」も、B) で同じ役割を果たす「水飛沫」も、A la nue accablante tu でのように現前する舞台装置だということである。そして関係詞節内の内容「無限に限りを置いた」と「そこからそれらの狂気が頂点まで飛び跳ねた」は、とても現実にあったとは思えない内容でありながら、YX のソネでの「冥界下り」のように、事実を描く直説法過去に置かれている²³。ただし直説法を正当化し、架空の内容を現実として描くための留保としての役割を果たすためには、括弧は動詞にもっと近い場所にあるべきではないだろうか。ここでは括弧の含む内容が多すぎて、留保として解釈するのはかなり難しいように見える。しかし実のところ「石」「水飛沫」の導入において、留保は既に行われていたのである。そもそもこれらの単語が導かれる際、「石」は人魚の尾が打ち砕くものとして、「水飛沫」は落ちてゆく羽根がたてたものとして現れるのであって、たとえ「石」「水飛沫」が単独では現前し得たとしても、その導入部の情景が既に幻影なのである。幻は幻のみで現れるのではなく、目の前の光景の中から「一瞬」浮かび上がる。こうして二篇の詩で分析した要素——現実離れした過去の出来事を「目の前の不在の原因」であるかのように事実として述べる——が、『骰子の一投』ではより複雑な形で括弧の部分で実現されているのが分かる。

*

*

*

リュベガの論は括弧の使用法の展開を欠いているだけでなく、括弧が削除されている理由についても、ただ、空白が括弧の代わりをしていると述べるに留まっている。見落としがちなことではあるが、文字配列を考える中で二つの版の最も大きな違いは、見開きで1ページか否かである。細かく比較すればする程、この視覚的効果の違いが内容全体に及ぼしている影響に驚かされる。とりわけ前後のページとの関わりは大きく変化してくる。そこでここからは各ページにとどまらず、前後のページや全体との関わりも視野に入れて、括弧を使用した理由について検討してみよう。

最初に括弧が現れるコスモポリス版第6ページについては、第7ページも合わせて第2章で既に検討している。繰り返すと、決定版とは異なりこの2ページでは *Si / c'était / le nombre / ce serait / LE HASARD* が、王子の苦悩に近付けて描かれているのである。第6ページで使われている括弧も同じ目的と考えられる。決定版では見開きのページ内には大きな文字は *Si* しかない為、読者はそのまま地の文を読みつづけることになる。その結果このページで最も印象に残るのは右下の *l'infini* に至る羽根飾りの落下のはずである。しかしながらコスモポリス版では右のページにある同じ大きさ、同じ字体の *c'était / le nombre / ce serait* が目に入るため²⁴、どうしてもそちらをまず読んでしまう。そしてその流れを補強するかのように、羽根飾りの落下は括弧の中に閉じ込められているのである。こうして羽根飾りの落下はかすみ、この見開きは王子の逡巡が主題として前面に押し出されるのである。

コスモポリス版には、困惑した編集者の要請に応じて決定版にはない序文が加えられている。その中でマラルメは詩編を楽譜にたとえ、文字の大きさを音の大きさ、幾つもの流れを主題と変奏と語っている。そう考えるならば、様々な大きさにイタリック体とロマン体の文字が文脈を織りなすコスモポリス版の第6、第7ページは、まさに様々な楽器が加わり複数の演奏が絡みあうクライマックスといえる。*Si* の前までの一本の調べに続くのは、文字の大きさや字体をもろともせず同時に複数のテーマを奏でる大合奏である。これは、まさに括弧、そして *c'était* の部分が小文字になったことによる効果と言える。余白を十分に取ることができないため単調になってしまいがちなコスモポリス版ではあるが、この2ページは、括弧使いやイタリック文字のなめらかさ、大文字小文字の使い分けなどによって、決定版に比肩し得る重層的効果をもたらしている。

少し遅くなってしまったがここで簡単に、この作品全体の構成における第2部（コスモポリス版第5～第7ページ）の役割について述べておこう。全体が3部構成からなるこの作品において、イタリック文字が主となるこの第2部は、その前後のロマン体で描かれているページ（＝物語としての筋）から外れた時間外の時間となっている。ここで主人公は、実際の行動（骰子投げ）を起こす前に、頭の中で自分が骰子投げを行ったらどうなるかを思い描

くのである。しかしマラルメが紙面上に骰子の姿を書き込んでしまえば、それは現実のものと変わらない。そこで代わり用いられるのが「羽根」なのである。夢の中で映像が思考を視覚化するように、船長の頭の中の予想「転がる骰子」を「落下する羽根」が視覚化しているのである。そして第3部の現実世界での骰子投げは第2部の幻を引き入れることによって、現実でありながら遙か彼方の夜空で行われる「星による骰子投げ」となって完成される。

以前拙論の中で決定版第9ページから第11ページの文字配列について詳しく論じたことがあったが、それは左右両ページをひと組とした紙面があって初めて可能となる。例えば第9ページでは、中央を横切る水平線を挟んで海と空、向かい合う夜空の星と沈んでゆく羽根が描き出されていたが、縦長のページではあり得ない。もう少し詳しくその部分を説明すると、決定版では *CESERAIT* から *LE HASARD* まで伸びる線が水平線であり、その下のイタリックで書かれた部分が字体の上からも内容からも第2部を踏襲する「深淵に沈んでゆく羽根」、水平線から上が字体・内容の双方から最終ページを予告する「星による骰子投げ」であると考えられるものである。YX のソネや「類推の魔」(『ディヴァガシオン』) でマラルメが利用したのは、水面やガラスの持つ二重の効果——「向かい合うものを映す」と同時に「奥にあるものを透かして見せる」ことである。そのことは又、水面やガラスの表面上に「別の場所にあるものの架空の結合」を生じさせる。『骰子の一投』においても同様の現象が起きている。すなわち水に沈んだ羽根と夜空の星が水面上の偶然の結びつきによって互いに映し合い、海底と上空が通じ合うのである。更にギリシャ神話のエピソードは²⁵、沈んでゆく羽根(=骰子)を北斗七星として夜空にあげるのを助けている。第9ページは単に上から下に読むのではなく、まずイタリックで書かれた下半分を読み、その後上を読む²⁶ という構図となっていると考えられる。こうしてこのページにおいて、第2部の幻が第3部の現実世界へと導入され、現実とも幻ともつかない「星による骰子投げ」が最後に出現するのである。

決定版第9ページにあたるコスモポリス版の第7ページに関して、ここまで触れてこなかった重要な相違がある。それは、2行目の *issu stellaire* と後半 *pire* 以下4行が、イタリック体ではなくロマン体となっていることである。

決定版では *issu stellaire* がイタリックであることが、下から上への移動の要となっていた。しかしその意図の全くないコスモポリス版では他の星を示す語群 EXISTÂT-IL 等と同じロマン体にする方が確かに自然である。更に付け加えるならば、決定版でのように *C'ÉTAIT* の下に隠れるように置かれるよりも、こうして上段の中央に単独で置かれた方が「星となって現れる」イメージが明快となる。pire 以下については、決定版では上半分をロマン体、下半分をイタリック体にそろえる必要があったのでイタリックでなくてはならないが、ここではむしろ上からの流れにそってロマン体にするのが妥当であろう。むしろ *c'était / le nombre / ce serait* 以外を全てロマン体に統一することで、マラルメはある大きな効果をこの版に与えたのである。すなわち右下の最後にある *Choit / la plume* に、決定版とは全く違ったものとして新たな生命が与えられたのである。

ところで何故コスモポリス版では第7ページを *Choit / la plume* の後で切っているのだろうか？ 分量的に入らなかったはずはない。しかし反対にそこで切ってはいけない理由もない。というのは決定版でのように水面を挟んで右上と右下の語群が映し合う関係が描けないので、EXISTÂT-IL から ILLUMINÂT-IL までと、*Choit / la plume* から *gouffre* までの文字の量をそろえる必要はないからである。

決定版第9ページが海と空の両方を描き、第2部と第3部を結ぶ繋ぎ目といった色彩を帯びていたのに対し、コスモポリス版の第7ページは基本的にはロマン体で星と骰子を描き出しており、むしろ第3部の幕開けとして最終ページへと一挙に物語りを押し進めるかに見える。夜空となるべきページだからこそ、深淵を思わせる要素はできるだけ排除しなければならない。そこで *rythmique* から *gouffre* までが次のページに回されたのではないだろうか。そして現実の海と空に第二部の幻を差し挟むために、わずかに *Choit / la plume* が残されたのである。最後に再び現れる羽根、それ以前のページから亡霊のように蘇った羽根は、この世ならぬものとして括弧にくるまれ、その非現実性を最終ページの現実に滑り込ませようとしているのではないだろうか。これはまさに決定版の第9ページのねらいでもある。そしてこの括弧が閉じられるまで——第8ページ7行目までこの効果は続き、第8、第9ページとい

う見開きの紙面上にちりばめられたロマン体の文字群の中に、イタリック部分＝非現実性の貫入を起こしている。

決定版では第2部のイタリックで書かれた見開きの紙面が3度繰り返された後、第9ページでイタリック体とロマン体が同じ分量で現れ幻想が現実の中に自然と滑り込み、第9～第11ページで2度紙をめくる間に深淵から夜空への移行がゆっくりと完成される。しかしコスモポリス版では異なる内容の左右のページが同時に目に入ってしまうため、第4、第5ページの見開き一枚では左がロマン体、右がイタリック、第6、第7ページでは左がイタリック、右はイタリックを含んだロマン体中心のページ、第8、第9ページは左上にイタリックを含むがどちらもロマン体とめまぐるしく変化して、ページごとの文字遣いの違いが分かりづらい。第7、第8ページでの *Choit / la plume* から *gouffre* までが第5第6ページの幻とは異なり、現実挿入された幻であることを示すためには、単にイタリックにするだけではなく括弧に入れることが必要だったのであろう。紙面構成の違いを克服し、イタリック体で書かれた非現実をロマン体の現実へと直接入り込ませる為に、ここでの括弧は不可欠な要素なのである。

— 結論 —

これまで行ってきた2つの版の比較は、次の3種類に分類される。まず、制約の多いコスモポリス版では実現されていない決定版での効果を検討すること。それが第一章で分析したものである。この作業によって、いかに『骰子の一投』の紙面構成が画期的なものであったかが明確になった。

次に、コスモポリス版において決定版以上に効果的な文字配列となっており、かつその表現が決定版に反映されていない箇所分析である。第2章における *prince amer de l'écueil* の位置の移動などがその例にあたる。この場合、結局のところマラルメはその効果的表現を最終的な草稿に残さず、別の方法を取ったのであるから、マラルメの中での優先順位がより高かった後者の重要性を再認識することになる。とはいえ決定版では完全に消えてしまったコスモポリス版ならではの効果を検討することは有益である。最後に、それぞ

れの版が異なった方法を取りながら、同じ一つの効果を生み出している箇所
の検討がある。それが第2章の一部と第3章で分析した *Si c'était le nombre ce
serait le Hasard* を中心とした部分である。二つの版はそれぞれの形態を活か
し、別々の方法で「現実の情景に幻をずらし込もうとしている」ことが見て
取れた。

この作品の文字配列は各ページ内だけでなく、第1部、第2部、第3部そ
れぞれを別の統一性でまとめあげ、かつ、第1部第2部を融合させながら第
3部の終局へと向かう形になっている。イタリック体を部分的に変更したり、
文字の位置を左右にずらしたりなど、意味内容だけ分析するなら一見それほ
ど変わらないような変更が、実は何ページにも及ぶ視線の流れを射程に入れ
たものであり、決定版、コスモポリス版それぞれの紙面に合わせて、まるで
別々の作品でもあるかのように細かい修正がなされたのである。

視覚的な効果はともすれば読者を受動的にしかねない。しかし『骰子の一
投』の文字配列は、視覚の幻によって読者自身が詩的現象を生み出す手助け
をしている。もし本論で行ったような詳細な分析がなければ、二つの版での
変更を根拠に文字配列の重要性に疑問を投じることもできたであろう。しか
し、大きな制約を背負ってなおマラルメが推敲していったコスモポリス版で
の様々な工夫を検討することで、二つの版が別の形で追求した唯一の目標—
—読まれる度に詩という現象がそこから浮かび上がる書物の完成——が、本
論文で浮き彫りになったと考えられる。

注

- 1 Stéphane MALLARMÉ, «Un Coup de Dés jamais n'abolira le Hasard» in *Cosmopolis*, Cos-
mopolis, mai 1897. *Œuvres Complètes I*, Gallimard, <Pléiade>, 1998 再録。
- 2 1897年5月14日付け。Stéphane MALLARMÉ, *Correspondance*, Gallimard, <folio clas-
sique>, 1995, p.632.
- 3 *Ibid.* p.631-632.
- 4 *Un Coup de Dés jamais n'abolira le Hasard*, Édition de la Nouvelle Revue française, 1914.
- 5 *Un Coup de Dés jamais n'abolira le Hasard*, Éd. Mitsou Ronat, Change errant / d'atelier,
1980. マラルメの意志により近いといえどもこの版に欠点がなかったわけではない。
そのいくつかの欠点、及び NRF 版、ロナ版の詳細については Jean-Claude LEBEN-

SZTEJN, « Note relative au Coup de dés » in *Critique*, n° 397-398, 1980 を参照のこと。

- 6 1897年10月5日付け書簡。MALLARMÉ, *Correspondance, op.cit.*, p.286.
- 7 マラルメの構想した決定版が勿論、この作品の最良の形態であると考えてことに異論はない。しかしながら、書物が個々の現実として実現されるには、多少の妥協は必ず現れるのではないだろうか。つまり豪華本には豪華本としての体裁があり、それに引き摺られる面が皆無とは言えなかったのではないだろうか。

例えば計画ではルドンの挿し絵入りでの発行が予定されていたが、これは出版元がコスモポリス版との差異化を図り、販売を促進するために考えたものである。アンケートに答えて「私が賛成するのは——挿し絵なし[…](*Œuvres Complètes II*, Gallimard, <Pléiade>, 2003, p.668.)」と語ったように、マラルメは挿し絵そのものはない方が良いと思っていた。しかし、マネの挿し絵入りの『大鴉』『半獣神の午後』の出来には手放して喜んだように、ときにその魅惑は抗い難かったようである。又、ルドンがマラルメの敬愛する画家であったことから挿し絵の計画を歓迎したことは当然といえよう。(ルドンの挿し絵については Robert Greer COHN, *Mallarmé's Masterwork — New Findings*, La haye, Mouton, 1966 あるいは Léon CELLIER, « Mallarmé, Redon et <Un coup de dés > » (XXVI^e Congrès de l'Association, le 26 juillet 1974) in *Cahiers de l'association internationale des études françaises*, association internationale des études françaises, 1974 を参照のこと。)ここに、架空のままの理想に対して、物体としての書物における個々の現実という齟齬を見ることがもできる。

こう言うてしまうのは極端かもしれないが、もし計画通りに決定版が出版されていたとしてもそれは豪華本という体裁での完成であって、どれだけそれが理想に近い形であったにせよ『骰子の一投』のこの世に現れた一形態にすぎないとも考えられるのではないだろうか。

- 8 分析に際しては、便宜上決定版には最も忠実とされるロナ版を用いる。
- 9 勿論 fiançailles の f が決定版では大文字で強調されていることも見過ごせないが、N'ABOLIRA の位置の違いの持つ効果はそれとは比較にならないほど大きい為、ここでは論の流れを分断しないように註で言及するに留める。
- 10 「YX のソネ」、『無限』第 3 9 号、無限、昭和 5 1 年、p.108。
- 11 éperdue (狂乱した)は、同音の et perdue (そして失われた)を連想させ、この羽根の非在性を補強している。
- 12 第 5 ページでは、決定版でのほぼ 2 ページ分(第 6 ページと第 7 ページ)が、縦に並べられている。
- 13 コスモポリス版が先に書かれたことを考えれば、9 ページの内容を 11 ページに増やしたと考えるのが自然なのかもしれない。しかしこれらの変更部分、とりわけコスモポリス版第 5 ページを見る限りでは、雑誌の紙面が足りなかったため本来の形を縮めたようにしか見えない。コスモポリス版脱稿の後決定版に取り掛かったにせよ、ジッドへの手紙にある「半分しか表現できなかった」という表現から考えても、既にある程度決定版の構想はできていたように思われる。
- 14 詳しい分析は拙著『マラルメ作品における虚構の場～「書物」をめぐる～』(大阪外

国語大学出版委員会、1998年)を参照のこと。同様に今後本論文で分析を簡略化、又は省略している場合、それはこの本で既に論じられているためである。

- 15 LE HASARDのみ大文字ロマン体。表題 UN COUP DE DÉS JAMAIS N'ABOLIRA LE HASADの一部。
- 16 Nikolaj D'origny LÜBECKER, *Le sacrifice de la sirène*, Museum Tusculanum Press, University of Copenhagen, 2003, p.56.
- 17 それ以外に括弧に類するものとして、コスモポリス版の最終ページ、最後から2行目で罫線が用いられているという違いがある。一ページの中に多くの要素を含まざるをえないコスモポリス版において、最終行の独立性を保つためにはこの罫線が必要であったと思われる。
- 18 Robert Greer COHN, *Mallarmé's Un Coup de Dés : an exegesis*, Yale French Studies Publication, 1949, p.81, p.91.
- 19 LÜBECKER, *op.cit.*, pp.33-37.
- 20 この後彼は、どちらの詩においても括弧の中の要素が「何らかの答え」を与える(与え得る)要素であり、人魚の場面も又「答え」を与える部分となっているという方向で論を展開している。
- 21 完全な事実というわけではないが、純然たる「幻」に比べ、「事実であったかもしれないこと」というかなり現実に近い位置付けになる。
- 22 これら二箇所でも主節は直説法現在であり、単純過去は関係詞節の中で使われている。
- 23 ただし YX のソネでは複合過去、『骰子の一投げ』では単純過去という違いがある。
- 24 ここで用いられた活字はかなり太く、ペンで書いた筆記体のようなニュアンスが際立っている。
- 25 ニンフのカリストが亡くなって夜空に上げられ、大熊座となったとというもの。この神話についてはマラルメ翻訳『古代の神々』でも取り上げられている。YX のソネではより明確にこの神話が暗示されている。
- 26 2行目の *issu stellaire* がイタリックとなっているのも、下から上(イタリックからロマン体)に読んでいくことを確信させる。

UN COUP DE DÉS

『骰子の一投』コスモポリス版

(MALLARMÉ, *Oeuvres Complètes* / pp. 393-401.)

JAMAIS

QUAND BIEN MÊME LANCÉ DANS DES
CIRCONSTANCES ÉTERNELLES

DU FOND D'UN NAUFRAGE

LE MAITRE

hors d'anciens calculs
où la manoeuvre avec l'âge oubliée

SOIT
que

surgi
inférant

jadis il empoignait la barre

l'abîme

de cette conflagration
à ses pieds

blanchi

de l'horizon unanime

étale

furieux

sous une inclinaison
plane désespérément

d'aile

la sienne

par avance retombée d'un mal à dresser le vol
et couvrant les jaillissements
coupant au ras les bords

esprit

pour le lancer

dans la tempête
en reployer l'âpre division et passer fier

le nombre unique qui ne peut pas en être un autre

très à l'intérieur résume

hésite

tout chenu

cadavre par le bras écarté du secret qu'il détient

l'ombre enfouie dans la transparence par cette voile alternative

jusqu'adapter

à l'envergure

sa beam'e profondeur en tant que la coque

plutôt

que de jouer en maniaque la partie
au nom des flots

un envahit le chef
coule en barbe soumise

d'un bâtiment

navfrage cela direct l'homme

penché de l'un ou l'autre bord

sans nef
n'importe

où vaine

prince amer de l'écueil

*s'en coiffe comme de l'heroïque
irrésistible mais confiant
par sa petite raison virile*

en foudre

soucieux

*capiteuse et pâtre
muet*

rire

que

Si

*(La lucide seigneuriale aigrette de vertige
au front invisible*

scintille

puis ombraie

*une stature nigronne lénébreuse debout
en sa torsion de sirène*

le temps

*de souffler
par d'impalpables squames ultimes bifurquées
un mystère*

jeux roc échoiré en brume

qui impose

une borne à l'infini)

c'était

issu stellaire

le nombre

EXISTÂT-IL

autrement qu'halicination éparse d'agonie

COMMENÇAT-IL ET CESSÂT-IL

sourdaient que nité et clos quand apparut

enfin

par quelque profusion répandue un rarcité

SE CHIFFRÂT-IL

évidence de la somme pour peu qu'une

ILLUMINÂT-IL

ce serait

pire

non

d'avantage ni moins

mais autant indifféremment

LE HASARD

(Cloit

la plume

rhythmique

suspens des sinistres

s'ensevelir

aux écumes originelles

megères d'où sursauta leur délire jusqu'à une cime
flétrie

en la neutralité identique du gouffre

RIEN

de la mémorable crise

ou se fut l'événement accompli
en vue de tout résultat nul

humain

N'AURA EU LIEU

une élévation ordinaire vers l'absence

QUE LE LIEU

inférieur clapotis quelconque comme pour disperser l'acte vide

abruptement qui sinon
par son mensonge

eût fondé

la perdition

dans ces parages

du vague

où toute réalité se dissout

EXCEPTÉ.

à l'altitude

PEUT-ÊTRE

aussi loin qu'un endroit
fusionne avec au delà

hors l'intérêt

quant à lui signalé

en général

selon telle obliquité par telle déclinivité
de feux

vers

ce doit être

le Septentrion aussi Nord

UNE CONSTELLATION

froide d'oubli et de désuétude

pas tant

qu'elle n'énumère

sur quelque surface vacante et supérieure

le heurt successif

sidéralement

d'un compte total en formation

veillant

doutant

roulant

brillant et méditant

avant de s'arrêter

à quelque point dernier qui le sacre—

Toute Pensée émet un Coup de Dés